

短歌 (投稿順)

人間と熊との戦い今日も亦必死の作戦練る人々
 団塊は教室不足小学校今は生徒が不足で閉校
 美の山で熊目撃と町メールその後の情報もつと知りたし
 母亡くし代替わりした姪子から本場の新茶届きて嬉し
 森霧中^{もりむらさき}先行者様の鈴の音がシャランシャランと不安被いて
 台風の大きな被害恐れつゝ、慈雨の泌み入る庭を眺める
 結婚後の悲喜交々の日記帳卒寿を過ぎて片付け始む
 花雪のごとしこぼれる南天の花は散りてし梅雨の晴れ間に
 戦中戦後の物資なき時代^{とき}を回想す断捨離といふ言葉に疑問
 熊出たと知らせありたる我が里もひとごとで無き今の時代は
 月毎に「クルマはなおりましたカ」と仕事場にあるヴーさんは訊く
 どうしたンそんな淋しい顔をして必ずいくからそこでまってる
 闇深くされど優しく輝けり家族と見つめし二十歳の螢

皆野 根岸 詩子
 上田野沢 四方田利男
 皆野 引間 万亀
 下田野 新井 節子
 皆野 大澤 貴夫
 皆野 萩原 初恵
 下田野沢 浅見 豊子
 国神 藤原マキ子
 三沢 新井 叶子
 三沢 新井 民子
 皆野 打木 昭廣
 皆野 林田 凜太
 皆野 太幡琉美花

俳句 根岸茉莉 選 投稿数 31 句

肌^{かわ}が知る昭和の風や扇風機
 (評連日の猛暑でエアコンのない生活には耐えられない昨今ですが、扇風機の音や首を振って送られてくる優しい風に、作者は肌で感じる涼しさと共に若い昭和の頃の家族、友人達、田園風景など懐かしく甦りました。扇風機も又良しですね。二句目、家族が揃う団欒のひととき。壁に見つけた一匹の守宮。忍者のようにびつたりと張り付き時々首を傾げて皆の話しに聞き耳を立てているみたいに感じた作者。ユーモアのある楽しい句にまとめました。三句目、大地震の被害から二年経った能登。復旧は一段落と言われながらもまだ故郷に戻れない人達も多い様です。早く元の風光明媚な活気ある地にと、夏空に祈りを込めての放鳥です。願いが届きますように。聞き耳を立ており壁のやもり哉
 夏空へ能登復興の鳥放つ
 皆野 萩原 初恵
 皆野 根岸 詩子
 太宰忌や生きて二十歳の脈を打つ
 皆野 太幡琉美花
 草刈られ川風届く我が家かな
 三沢 新井 民子
 凌霄花^{れんそうか}夢見しままにこぼれおり
 皆野 吉田香代子
 雨あがる八雲の旧居の揚羽蝶
 皆野 櫻井 早苗
 山峡に兜太の句碑や夏の雲
 国神 鈴木 正文
 新馬鈴薯^{しんばしやが}を試し掘りして昼の膳
 皆野 引間 千鶴
 不如帰^{はとがき}せわしく鳴いて何事ぞ
 国神 久米雄志郎
 棟上げの木槌遠音に梅雨晴間
 皆野 島 弘
 水がめにきらりと光るめだかな
 三沢小五年 山口明沙空
 梅雨始め美しい響きかさの上
 三沢小六年 長島 千晏